

ISSN 0919-0120

2014.1 No.87

郷土資料館
豊田資よ
土だり

No.87

Toyota City Museum
Of
Local History

東大寺通し矢絵巻(部分)

目次

- ・平成25年度豊田市郷土資料館特別展
「一弓入魂〜とよたの弓文化をさぐる〜」…………… 2
- ・平成25年度特別展準備レポート3
孝母藩・東大寺で通し矢開催！…………… 3
- ・民具調査だより-14 松魚-勝男武士…………… 4
- ・ミツドンブリを追いかける
-近世・近代の食文化(3)-…………… 5
- ・どっちの民俗SHOW!! -歌舞伎と弓道-…………… 6
- ・平成25年度発見館企画展
「古い道具と昔の暮らし 明治の発明品」…………… 7
- ・文化財シリーズ87 国指定文化財 絹本著色仏涅槃図…………… 8
- ・資料館NEWS…………… 8

昭和54年(1979)9月5日
六所神社 弓神事

和合町神明神社金的中奉納額

一弓入魂 ～とよたの弓文化をさぐる～

平成26年1月25日(土)～3月9日(日)

平成25年度の特別展は、「一弓入魂」と題して弓文化をとりあげます。弓文化は「矢先」「かけがえのない」「矢面に立つ」など多くのことわざが残ることからもわかるように、日本人の言語や価値観に深く根づいています。

狩猟のための道具「狩矢」から武器としての「征矢」へ発展し、さらには精神性を深く求め、型を重んじる弓道が誕生します。こうした弓文化の歴史をたどっていくだけで日本の歴史における弓と人との関わりを知ることができます。

また弓はこの地域において特に盛んであるという事実を多くの資料から知ることができます。みなさんの周囲にも弓を引く、あるいは学生時代に弓道部だったという人がいるのではないのでしょうか。以下、展覧会の内容を簡単にご紹介します。

●第1章「弓の起源」

日本の弓矢の起源は縄文時代に始まります。

豊田市幸海町にある酒吞ジュリナ遺跡では縄文時代の「矢柄研磨器」と思われる石器が見つっています。その使用方法には未だ研究の余地があるようですが、弓矢の製作に使っていたことも推測されています。

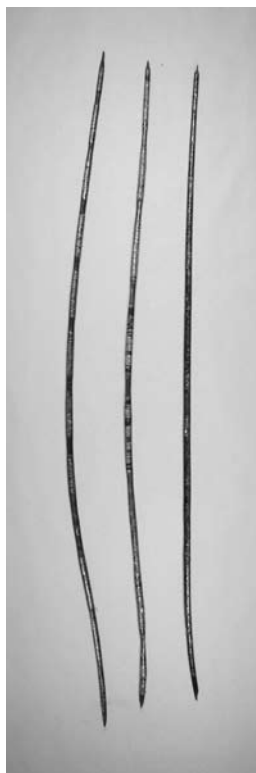
展示では、縄文時代から歴史時代の弓、鏃のほか、文献・絵画資料を展示します。

●第2章

「弓と挙母藩内藤家」

豊田市の中心部市街地にあった挙母藩を江戸時代の半ば、寛延2年(1749)から治めた挙母藩内藤家には、弓に関する資料が多くあります。内藤家の祖・内藤家長が弓の名手で知られ、8月1日には家長のお祭りとして弓の奉納が行われましたし、藩主自ら弓を習い免許を受けたり、藩士に奨励したりしています。

とりわけ五代藩主政優は、脚が悪かったこともあり、騎馬上でも座位でも行える弓に熱心に取り組み、藩内でも盛んに行われています。政優が奈良東大寺で行った通し矢は次頁で紹介しますが、この章では、内藤家



飾り弓(古墳時代)

長の矢といわれる古い矢、江戸時代の弓、藩士が書き写した多くの弓術書をご覧ください。

●第3章

「山間地域の弓」

ここでは現在も続く弓神事や矢場の紹介をし、地域へのアンケートや聞き取り調査をもとに神社などに奉納された金の中奉納額からその興隆ぶりを見ていただきます(「豊田市郷土資料館だより」№86参照)。確認できたうち、市内に残る最も古い弓神事の記録は足助八幡宮で行われた元禄7年(1694)のものでした。

●第4章「足助の矢師」

足助町「いろは竹工所」では竹矢作りの技法が伝承されています。現在の矢はグラスファイバーなどの素材が多くなり伝統的な竹矢製作を行える矢師は全国的にみても珍しくなっています。矢は真っ直ぐでなければ飛びません。節や反りがある自然の竹矢を矢に仕上げていく工程を聞き取りし、その一部始終をパネルでご覧いただけます。

●第5章「現代の弓道」

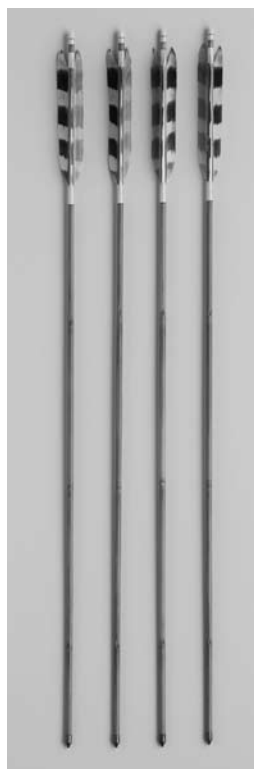
現代の弓道の章は、流派ごとに師弟関係により伝えられていた弓道から、誰もが親しむ体育弓道へと発展した現代の弓道連盟や学校弓道について紹介しています。

展示を通して地域に伝わる弓文化について理解を深め、熱き弓引き達の息吹を感じていただければ幸いです。



犬追物の絵

の記録は足助八幡宮で行われた元禄7年(1694)のものでした。



「いろは竹工所」製作の竹矢
二代茂氏・三代武夫氏合作

挙母藩・東大寺で通し矢開催!

安藤早太郎の記録8,685本



「東大寺通し矢絵巻」
松波佐平 弓具店蔵

■ 通し矢とは

「通し矢」とは、「遠矢」ともいい、遠くにある的を射る競技で、京都の三十三間堂の通し矢が有名です。京都の名所を描いた洛中洛外図にもみられるほどでした。三十三間堂では、本堂裏の縁の端から、その反対の端まで長さ121.73m、一の垂木までの高さ4.94mという空間で弓を射るのです。貞享3年(1686)に紀州藩和佐大八が、一昼夜のうち総数13,053本中8,133本を射通したのが最も多い記録として残っています。

■ 挙母藩の通し矢

挙母藩は、天保13年(1842)4月20日から21日にかけて奈良東大寺の西回廊で通し矢を行いました。その時の様子を描いた絵が上の「東大寺通し矢絵巻」です。遠景に大仏殿の屋根が描かれ手前の回廊の左端に弓を構える人、右端には的が置かれています。一昼夜を通して矢を射るため、明りとしてかがり火が燃え、火消し役が回廊の屋根に待機しています。手前には大勢の見物人がおり、物売り小屋も見られます。



「東大寺通し矢絵巻」(部分)

射手は挙母藩士の安藤早太郎でこの時、総矢数11,500本中8,685本の矢を射通すことに成功しました。

東大寺の西回廊の長さは106.8m、ひさしまでの高さは4.1m、三十三間堂より距離が短いものの、高さが低いという厳しい条件になります。条件が違うため三十三間堂との比較はできないとはいえ、大記録を達成し安藤早太郎そして挙母藩の名を世間に広く知らしめたことは間違いありません。

■ なぜ通し矢が開催されたか?

通し矢が開催された時の挙母藩主は五代内藤政優まさひろでした。政優は彦根藩主井伊直中の十三男で、安政の大獄で知られる大老井伊直弼(直中14男)とは兄弟です。幼少の頃に脚を患い歩行が困難であったといいますが、文武振興につとめ、挙母藩中興の祖と呼ばれています。

この政優の治世、天保7年(1836)に挙母藩周辺では稲、麦ともに凶作であったうえ、米価が高騰したことなどで一揆が勃発しました。一揆の一団は打ち壊しを繰返しながら挙母城下に迫りましたが、この時、藩主・政優は参勤交代で江戸におり、一揆勢にすばやく対峙し鎮圧に尽力したのは岡崎藩でした。政優としては岡崎藩に先んじられたという思いがあったのでしょうか。この時、幕府の大老は実家の井伊家、対応次第で政治的な汚点となる可能性もある状況です。こうした事態を払拭し名を上げるために通し矢が計画されたのではないのでしょうか。この一揆以降、挙母藩は天保10年(1839)に猿投神社で流鏑馬を奉納、さらに政優は大坂加番の役職で大坂城にいた天保11年(1840)に、紀州藩の高木應心斎を呼んでいます。藩主の近習であった安藤早太郎も側にいて應心斎から弓の手ほどきを受けていると思われ、着々と東大寺通し矢に向けての準備が進められていきます。

展覧会では、絵巻のみならず、通し矢開催に向かう挙母藩の関係資料を初公開資料も交えて展示します。

(伊藤 智子)

松魚一勝男武士

遺されたひとつの物から

民具の調査・登録作業の過程で現れたひとつの物が、別の物と密接なつながりを持っていることに気づかされる事がたびたびあります。写真-1は、手縫い糸やミシン糸が納めてあった木箱。蓋の表には“松魚”と書かれており、裏には旭日双鶴図^{きよくじつそうかくず}とでも言いましょうか、きれいな丹頂鶴^{たんちやうづる}が描かれています。なんとなく、お目出度い感じの物ではあるなと想像はできるのですが、まず“松魚”が解らない…。読みは「マツウオ」ではなく「ショウギョ」。辞書には、『カツオの異称』とありました。では、何故このような異称で呼ばれるのかを調べてみると、鰹節の色が松の木の赤い色に似ているとか、鰹節の切り口が松の樹の年輪に似ているからといった諸説があり、さらには表面の黒皮、肌の笹模様、先端の梅形の削り方が松竹梅に見立てられ、鰹節は目出たい席に欠かせない贈り物となったと書かれています。加えて、松の緑の気高さを讃える意味で、“松魚節”と書いて、“カツオブシ”と読ませると言う。

松魚は鰹のことを指すのではなく、鰹を加工した鰹節のことを言っているようです。そもそもカツオの語源はというと身が堅いという意味で堅魚(かたうお)に由来するようで、なるほど魚+堅いで鰹の字になります。

神饌・縁起物として

鰹の干物は献納品でもあったようですし、干鰹は神饌の一つでもあります。縁起物としては、古く武家の保存食や非常食として常備されていた品で、いざ出陣と言う時には武運長久の縁起物としてあつかわれました。縁起をかつぎ、“勝男武士”と漢字をあてることがあったようです。

鰹節とは

鰹の身を干して乾燥させ、長期保存に耐えるものに加工することは古来より行われていましたが、江戸時代に燻煙^{くんえん}することによって水分を効果的に除去する製法(焙乾法^{ばいかんほう}: 燻乾法^{くんかんほう})が考案され、現在の私たちが知っている鰹節が生まれました。蒸した鰹の身を生干しにしたものが「生節(なまりぶし)」、それを焙乾したものが「荒節」、さらにその表面を削ってカビ付けしたものを「枯節」といいます。鰹節の製造は、頭を落とし三枚に下ろすところから始まり、3kg以下の小さな鰹はこのまま半身を加工しますが、大きめの鰹はさらにそれを背側と腹側に分け四枚とします。半身で作っ

たものを“亀節”、四枚に切った身で作ったものを“本節”といいます。本節は背側を背節=雄節(おぶし)、腹側を腹節=雌節(めぶし)といいます。

引き出物として

結納や結婚式、内祝いなどで鰹節が贈り物として使われる訳は、もうなんとなく解りましたネ！雄節と雌節を合わせると一対になり、『新郎・新婦の二人が揃って一つの形をつくる』という訳です。また、雄節と雌節を合わせた形が亀の甲羅に似ている事からとも言われています。蓋裏の双鶴と亀で鶴亀が揃うという次第です。合わせて一つということが大切で、半身の鰹節を使うのは筋から外れます。

おわりに

この例のように、松魚という文字が書かれてなければ、この資料は裁縫道具箱で登録終了ですが、その文字から、松魚～鰹節～引き出物へと、その物の持つ隠された意味へとたどり着くことができました。こんな楽しみがあるので民具調査はやめられません！。

(東海民具学会 岡本大三郎)



写真-1 W240 H88 D317



蓋裏の双鶴



写真-2 W208 H75 D274

松坂屋のラベルあり

箱にラベルあり
「洗朱 尺一寸
松竹梅」



写真-3 W240 H90 D330

ミツドンブリを追いかける

—近世・近代の食文化(3)—

確認できた近世の「ミツドンブリ」

「こんなものを見つけたよ」。今年6月頃、本誌でも「民具調査だより」などでお馴染みの、岡本大三郎氏から声を掛けられました。旧挙母町西浦(現在の西町)で製糸工場を営んだ、吉田家(屋号 藤屋)ゆかりの品についてです。

それは、陶磁器類などを収納するための外径23.8cm/内径22.4cm/高さ13.5cmの桐箱であり、蓋表には「志野 具足櫃 蓋付向 五 三ツ井 藤屋仁平」、蓋裏には「弘化四年丁未十二月」の墨書が残されていました。

挙母地区においては、挙母藩士 村上俊平^{むらかみわへい}の日記中にも、文久4年(元治元年 1864)正月五日「(前略)三ツ井 煮酢あへ したし菜 こんにゃく煮付(後略)」の記述が確認できます(神谷早苗編『年内御用向并私用控日記』)。また、先稿において、足助の商家であった小出家では、安政4年(1857)の「お駒安産男子出生諸色控」中に、「三ツ井」の記述が確認できることを紹介しました。

残念ながら、吉田家で確認された桐箱に収められた器は伝世していません。弘化4年(1847)の箱書を有する桐箱を確認できたことは、既にその頃、ミツドンブリ用の器が備えられていたと推測できなくもありません。ただし本来この箱には、具足櫃形(入隅四方形)で、蓋を伴う志野焼の向付が収められていたようであり、後に転用されてミツドンブリが収められた可能性が高いことから、吉田家にミツドンブリがもたらされたのは、弘化4年以後と考えたほうが適切でしょう。

どのような器だったのか？

幕末、豊田市周辺で用いられたミツドンブリはどんなものだったのでしょうか？近隣の瀬戸・美濃窯では、

この時期のミツドンブリの生産は確認できず、生産が確認できるのは明治10年代中頃以降のことです。

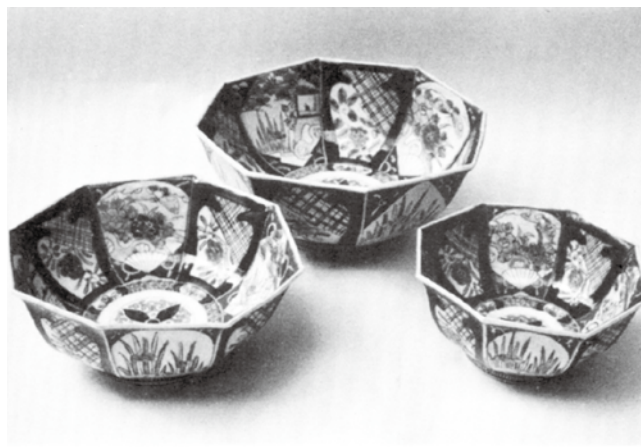
『旭町誌 資料編』には、民具(食具)として、豊田市旭地区で使用された磁器製のミツドンブリが掲載されています(同書844頁)。この資料は現存していないため、同書に掲載されたモノクロ写真からどのような器か判断するしかありません。器の平面径は、大22.8cm/中20.5cm/小16.8cm、平面形状は八角、内外側面と見込みは、赤彩と金彩で上絵付しているようです。

このような磁器製品の特徴は、江戸末期の瀬戸・美濃窯産の中には確認できず、他の産地を想定しなければならぬでしょう。幕末における赤絵の磁器製品は、犬山(愛知県)、伊万里(佐賀県)、湖東(滋賀県)、京(京都府)、九谷(石川県)などの産地がありますが、広域流通したものであり、かつ生産量の多寡で想定すれば、伊万里製品である可能性が最も高いと判断できます。おそらく、足助の小出家や紙屋鈴木家、先稿で紹介した小原地区の伊藤家など、1850～1860年代という早い段階でミツドンブリの使用が認められる事例については、伊万里製品が用いられたのではないかとというのが私の考えです。もちろん江戸末期の桐箱に、明治期以降、瀬戸・美濃窯産のミツドンブリが収められたとする考えも可能ですが、それらの平面径は24cmを超えるものが多く、この桐箱では小さすぎる印象を持っています。次回は私の考えを、市外の類例や伊万里の生産地側資料で補って見たいと思います。

本稿を執筆するにあたり、吉田高康氏、岡本大三郎氏(東海民具学会)のお世話になりました。お礼申し上げます。(高橋健太郎)



弘化四年銘 桐箱



『旭町誌』所収のミツドンブリ

どっちの民俗SHOW!!

— 歌舞伎と弓道 —

三味線の音色と太夫の語りに合わせて演じる歌舞伎と、静寂の中、弓を構えて的を矢で射る弓道。一見別物とも思える両者が相見える時があります。それは一年に一度の祭礼時です。神様に奉納するのは歌舞伎か弓道か、はたまた両方なのか。ここでは、近代(明治～昭和初期)に、豊田市域の各村落の祭礼時に広く行われるようになった歌舞伎と弓道の関係性について考えてみます。なお、今回は歌舞伎や弓道が盛んな小原・旭・足助・下山・松平地区を対象としました。

＜歌舞伎の基本情報＞

- ・村人が役者となって秋の祭礼時に神社に奉納する。
- ・祭礼数ヶ月前から練習を行う。
- ・18世紀末頃から豊田市域でも歌舞伎が祭礼時に奉納されるようになった。
- ・衣装や化粧、道具等を揃えるため経費がかかる。
- ・市内78箇所(廃絶舞台を含めると136)に歌舞伎を行った舞台が残る。
- ・村落内の芸達者で万人講と呼ばれるセミプロ集団を組織し、農閑期に近隣・県外まで興行しに行った。
- ・万人講は小原・旭・下山・松平地区に存在していた。



昭和22年(1947) 雑敷町八柱神社での歌舞伎公演の様子

＜弓道の基本情報＞

- ・16世紀、徳川家康が三河・遠江・駿河の一般庶民にも弓を奨励したと伝えられる。
- ・祭礼時に弓神事が盛んに行われるようになった。
- ・足助八幡宮の矢場は、西三河の大矢場に数えられる。
- ・旭地区の松井家・山田家は日置流印西派の大師範。
- ・下山地区の大山家は太和流の大師範。
- ・弓神事で金的を射抜いた弓士は、翌年神社に金的中と記された額を奉納する。
- ・金の中奉納額は市内43箇所です800枚以上確認。

聞き取り調査からわかる実態

聞き取り内容(調査地)

- ・弓神事は行った。歌舞伎は住民も行ったが、主に万人講が演じた。(雑敷町八幡神社)
- ・弓神事は行った。(荏荳町峯森神社)
- ・弓神事と歌舞伎で奉納する神社と日程が違った。両方行う人もいた。(四ツ松町八王子神社・十明神社)
- ・歌舞伎は行ったが弓神事は行っていない。(中垣内町)
- ・歌舞伎と弓神事を行ったが、日程がずれていた。(黒坂町神明社・杉本町神明神社)
- ・旅役者に歌舞伎を依頼して行った。(杉本町神明神社、四ツ松町八王寺神社)
- ・弓神事の際に舞台から弓を引いた。(坂上町六所神社、笹戸町八幡神社、杉本町神明神社、旭八幡神社)

舞台・奉納額分布表

歌舞伎が盛んであったことを示す指標の一つとして舞台の存在があり、弓道が盛んであったことを示す指標の一つに金の中奉納額の存在があります。各地区の舞台数(廃絶舞台含む)と金の中奉納額が確認できた神社仏閣等及び奉納額数を表にしました。

地区名	舞台数	額確認神社	額数
小原	28	6	32
旭	25	7	138
足助	23	8	293
下山	15	11	298
松平	16	4	13
計	107	36	774

まとめ

金の中奉納額が多く残る旭・足助・下山地区は、時間を要する歌舞伎については旅役者や万人講に公演を依頼し、住民は弓神事を行う傾向にあったと考えられます。その背景には当該地区の大矢場や大師範の存在を見ることができます。しかし日程等をずらして、両方住民が主体となって奉納していた神社もあるため、一概には言えません。小原地区は舞台数が多く、金の中奉納額も少ないことから、住民は弓に比べて歌舞伎を優先して奉納していたのではないかと推測されます。

歌舞伎と弓の関係性について、祭礼時に両方を奉納する場合、日程をずらす等の計らいや、歌舞伎を万人講や旅役者に依頼するなどの調整を行って奉納されてきたと考えられ、住民の祭礼をより楽しもうとする意気込みを感じることができます。

(井上 直己)

古い道具と 昔のくらし 明治の発明品



発見館企画展 開催中!

「古い道具と昔のくらし
明治の発明品」

場所：近代の産業とくらし
発見館(喜多町4-45)

期間：開催中～平成26年
3月9日(日)まで

休館：毎週月曜日
(祝日は開館)

時間：9時～17時

はじめに

みなさんは発明というと何を思い浮かべますか? エジソンや豊田佐吉^{とよださきち}を思い浮かべる方も多いと思います。明治期の日本では、西欧の近代技術との出会いにより多くの発明品が生まれました。ここでは、発見館の企画展の中から、新醸造法の発明をはじめ多くの功績を残した宇都宮三郎^{うつのみやさぶろう}やガラ紡機、人造石について紹介します。

「近代化学の父」宇都宮三郎 (1834—1902)

幸福寺(豊田市畝部西町)に墓所のある宇都宮三郎は、尾張藩士神谷半右衛門義重の三男に生まれ、幕府に出仕、維新後は明治政府に雇われ、工部省に出仕した人物です。明治4～6年(1871～1873)、岩倉使節団の一員としてヨーロッパに赴き、帰国後はセメント・炭酸ソーダの国産化、耐火煉瓦製造、藍の製造法改良、電柱の防腐方法の開発などを行い、近代技術の発展と殖産興業に貢献しました。「化学」という言葉を使ったのも、宇都宮三郎がはじめてです。企画展では、「北水協会(現・財団法人北水協会)有効賞牌」(幸福寺蔵)、全勝飴樽^{ぜんしょうかざりだる}(当館蔵)を展示して、改良竈^{かまど}・新醸造法を紹介しています。

ガラ紡機の発明と臥雲辰致 (1842—1900)

ガラ紡機は明治6年(1873)に、現・長野県の僧侶だった臥雲辰致^{がうんときむね}が発明した和紡績機です。紡機を回すとガラガラと音がすることから「ガラ紡」と呼ばれました。明治10年(1877)の第1回内国勸業博覧会で、「本会中第一ノ好発明」として鳳紋賞牌^{ほうもんしょうはい}を受賞すると、ガラ紡

機は、従来の手紡ぎと比べて大変効率が良かったこと、洋式紡績機と比べて構造が単純で費用もかからなかったこと、洋式紡績自体がまだ軌道に乗る前だったことなどから、各地に普及しました。以前から木綿の産地であった三河地方では、宮島清蔵^{みやじませいぞう}、甲村瀧三郎^{こうむらたきさぶろう}、野村茂平次^{のむらもへいじ}らにより水車ガラ紡が、また、鈴木六三郎^{すずき ろくさぶろう}により船ガラ紡が始められました。明治13年(1880)、甲村瀧三郎は野村茂平次らと「滝井組合」(のちに「額田紡績組合」)を設立し、ガラ紡の普及発展に努めました。そして、明治10年代後半には、矢作川流域の西三河地方一帯は日本最大のガラ紡の産地となりました。

発見館の展示資料は、豊田市大内町地内で使用されていた大正期のガラ紡機です。

人造石の発明と服部長七 (1840—1919)

人造石工法^{じんぞうせき}(長七たたき)は、日本の伝統的な技法である「たたき」を応用し、碧南市出身の服部長七^{はっとりちやうしち}が開発した工法です。「たたき」は、石灰(消石灰)と砂や粘土を混ぜて水で練り、たたき締めて硬くさせる工法で、土間などを造るのに広く使われました。長七はこの工法を、明治9年(1876)に伝統的なたたきの工事をするとき、サバ土(風化した花崗岩)・石灰・水を原料にして、通常よりも柔らかく練ってたたき締めると、水中で石のように固まることを発見し、試行錯誤を重ね完成させました。

人造石工法は、セメントを用いたコンクリート工法が普及する以前の明治・大正期に、堤防や護岸など大規模な工事にさかんに用いられました。特に愛知県では、県の公式工法として用いられ、名古屋港の護岸など人造石工法による土木構造物が全国で一番多く残っています。人造石の特徴は、水に対する耐久性の高さであり、明治用水旧頭首工のように100年以上の間、矢作川^{やはぎ}の水流にも負けず、現存するものもあります。

おわりに

発明の陰には、そのために努力した人がいます。西洋事物の国産化にあたって、そのために尽力した人たちがいました。そういった先人たちの尽力の上に、今の暮らしがあるのだと感じます。(小西 恭子)

文化財シリーズ

87

国指定文化財
絹本着色仏涅槃図

今回ご紹介する文化財は、長興寺に所蔵されている「絹本着色仏涅槃図」です。

仏涅槃図とは、涅槃会（釈迦の命日である陰暦2月15日に、釈迦の遺徳奉賛

追慕のために行う法会）の本尊として古くから用いられたもので、釈迦が沙羅双樹の間で、永遠の死（涅槃）についたという説を絵画化したものです。釈迦の周囲には、菩薩・僧侶・天人・俗人男女など合わせて62体の参集者が描かれ、下方には45体の鳥獣や空想上の生物が描かれています。

本図は、縦229.2cm、横154.5cmという非常に大きな画面に、釈迦を中心にして仏弟子や信者たちの嘆き悲しむ様子がよく表されています。上部には天より下ってきた釈迦の生母、摩耶夫人の姿が描かれ、絵に奥行きを与えています。本図は鳥瞰

図風に描かれた点と、摩耶夫人の一群が乗る雲が量感豊かに表現されている点が特徴的なものと指摘されています。加えて、画面右上に「三川洲高橋庄集運雲山長興寺禅寺常住」、左上に「応永二十八年辛丑結制日翰緑比丘義陸」と墨書され、応永28年(1421)に比久義陸により長興寺に寄進されたことが分かります。



資料館NEWS

冬休み子ども週間開催

12月24日(火)～27日(金)と1月5日(日)の5日間、冬休み子ども週間を開催しました。来館した子どもたちや親子連れが、「すごろく」「福わらい」「羽つき」「こまわし」など昔ながらのお正月遊びを体験しました。クイズラリーでは、ワークシートを手に館内を見学しながら郷土の歴史や文化財を学んでいました。ワークショップでは、福だるまの絵付けや、ミニ破魔矢などのお正月飾りを製作し、日本のお正月文化に親しむ機会となりました。



地域学習サポーター研修会開催

12月10日(火)、市民ボランティアとして郷土学習スクールサポート事業に参加する地域学習サポーターを対象にした研修会を実施しました。今回は小中

学生の遺跡見学での案内解説の手順をテーマに、七州城隅櫓、近代の産業とくらし発見館、百々貯木場や足助の町並みを見学しました。

地域学習サポーターへの応募は、豊田市郷土資料館まで。
(随時受付 TEL 0565-32-6561)



郷土学習スクールサポートで「古い道具」体験

12月～2月にかけては、小学3年生が「古い道具と昔のくらし」の学習で郷土資料館を訪れます。「薬研」や「台ばかり」などを実際に使い、昔と今の道具の違いについて学んでいます。この単元の体験学習は出前授業でも実施しています。



利用案内

開館時間 9:00～17:00
休館日 毎週月曜日(祝祭日は開館)
入場料 無料(特別展開催中は有料)
交通 名鉄「梅坪駅」より南へ 徒歩10分
名鉄「豊田市駅」より北へ 徒歩15分
愛知環状線「新豊田駅」より 徒歩15分
とよたおいでんバス「陣中町一丁目」より西へ徒歩5分
駐車場 約20台

■豊田市郷土資料館だより No.87■

平成26年1月24日発行

編集・発行 豊田市郷土資料館

〒471-0079 豊田市陣中町1-21

☎ (0565) 32-6561 FAX (0565) 34-0095

E-mail: rekihaku@city.toyota.aichi.jp

URL: <http://www.toyota-rekihaku.com>

※豊田市郷土資料館だよりはHPでもご覧になれます。